

氏名	韓子霏
学位の種類	博士(美術)
学位記番号	博美第30号
学位授与年月日	令和5年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当者
題目	学位論文題目 齧と間、その機能と意義 —様々な刺激を配置した表現に向けて—
	研究作品題目 ①《ビット絵本》 ②《時刻顔-間伸び》 ③《無名の影-間伸び》 ④《自己適応-間伸び》 ⑤《光音電車-20220909 飯田線》
論文審査委員	主査教授 神田 每実 副査教授 阿野 義久 副査教授 佐藤 直樹 外部 茨城大学 審査委員 名誉教授 小泉 晋弥

1 学位論文の要旨

情報爆発の状態にある現代の高度情報化社会において、様々な概念が出現し、並列し、更にそれらが自由に結びつけられることで、様々な主張が次々と出現する。われわれの身の周りには沢山の情報/刺激が泡のように溢れ、そして消えて行く。アナログデータとデジタルデータの交錯、重複や輻輳に代表される、情報/刺激の充満の中では、私たちが受け取った情報は極めて複雑・高密度に絡まりつつ、次から次へと変容と変質を繰り返しながら消え去って行く。そのため、われわれには、最後まで明確な情報の姿が残されないように思われる。筆者の研究は、「このような時代における作品と呼ばれる人工物の中心にあるべきものは何か、置くべきものは何か」という自身の問いへの解を、表現の生成に関わる基本的な構造、事項への考察を通して得る、或いは確認をするところにある。

筆者は、藝術は素晴らしい、良いもの、豊かなものだと考えている。それ故「齧と間、その機能と意義 - 様々な刺激を配置した表現に向けて - 」と題した筆者の研究も、自ずと豊かな造形表現の実現を目指すものである。

全ての表現の成立には「要素」が必要である。本論文の中ではこの要素のことを「齧」という漢字を用いて表現する。「齧」とは演劇で使う用語であり、演劇の一場面 = scene、映画の一コマのように使われ、情報の最小の一纏まりという意味を示す。そしてその「齧」とともに現れ、その存在を支え、更に「齧」同士の関係の土台となるような広がりや、「間」という言葉によって表現するのである。

「齧」を支える広がりや「間」として捉えられる。つまり、作品は「齧」と「間」の重層として現れている。「間」は「間」としての機能を持ちながら、それ自体が置かれた、二

次元、三次元、或いは更に高次元の広がりにおいては「齧」としても機能するのである。筆者はこの様子を、「齧」を中心に周辺へ広がっていく「齧」と「齧」、「齧」と「間」の関係、構造を示したものであると考えており、更にその構造は、「齧」と「齧」の間、「齧」と言われる情報の最小限の一纏まりの内部においても、際限なく見出すことが出来るのではないかと考えている。そして筆者は、「齧」と「齧」、「齧」と「間」の間に生成される、関係、構造の中に、デジタル技術の進歩とともに展開する現代の高度情報化社会における、藝術の成立、表現の成立に関わる「このような時代における作品と呼ばれる人工物の中心にあるべきものは何か、置くべきものは何か」という自身の問いへの解が存在していると考えているのである。筆者は、自身が抱く以上の問いについて、「齧」と「間」この二つの要素を巡って作品を制作しながら、本論文を執筆することでこれらの問題に解答する。

筆者は、「齧」と「間」と呼ぶこととした二つの要素を巡って作品を制作しながら、本論文を執筆することで、「齧と間」の機能と意義について考察した。そして、第1章「ON/OFFのデジタル的な表現の可能性」では、デジタルの本質を論述した。筆者は、藝術表現を構成する基本的な要素として、ON/OFF というデジタルの最も基本的な単位を使って3点の作品を創作している。これらは、デジタル媒体を使用した表現としてのデジタルアートではなく、「デジタルの構造」を用いたアートである。ここでは、「デジタルの構造」を主題において創作した、作品《ビット絵本》《開き、閉じる》《時空標本》について論じ、次に「ON/OFF」によって説明されるビットの仕組み、構造から「齧」と「間」へ展開した筆者の考察について論じた。そして作品表現の要素としての「齧」と「間」の概念を論述し、続いて「デジタル」と「アナログ」の紛れやすい概念の差異と、デジタル化とアナログ化について考察した。

第2章は、「人間を媒体として齧と間の表現はどのようになるか」という問いを考えながら、作品制作を行い、できるだけ平易な記述を心掛けた。本章では、「人の顔」というモチーフを要素として、「齧」と「間」という概念を表現した作品について述べた。はじめに作品《顔》と《目を閉じて見た顔》について論じ、続いて、デジタルとアナログの技術と形式の確認と、情報/刺激、伝達、認知の仕組みについて論じた。作品《時刻顔-間伸び》《無名の影-間伸び》《自己適応-間伸び》について考察した。この3点では特に「間」の問題を追求したため、「間伸び」というサブタイトルを付すこととした。最後に、「齧と齧の間」＝「藝術作品」の在処について、点描、モザイクまたは映像という三つの表現手法を論述することで、「齧」と「間」が藝術作品の中で具体的にはどのような役割を果たしているのかを探求した。

第3章「環境をモチーフとした表現の試み」では、デジタルな情報と人間の行為が融合するような表現はどのようにして可能かを論述し、作品《団栗》と《光音電車-20220909 飯田線》について考察した。「環境」という概念を巡って制作した作品を説明しながら、環境-この世界の成り立ちと運行する法則-を立脚点として発展してきた人間社会の本質について、またはその本質を基にして現れた現象をモチーフとして試みた表現について論じた。

「環境」「世界」「人間社会」、これらの言葉は、一見それぞれ空間の範囲を示すものであるように見えるのであるが、実際は抽象的な概念といえる。「なぜこれらの抽象的な概念の中で、藝術というものが生まれ得るのだろうか。」この疑問を抱いて、筆者は、古代の文献から藝術という概念について探求した。筆者は、作品の創作と本論執筆によって、「齣」と「間」と、その「機能」が、「作品」と呼ばれる「人工物」の成立にどのような役割と意義を持つものであるかについて考察し、「齣」と「間」とその機能が、造形表現の成立に不可欠な存在であるとの考えるに至るとともに、「このようなに時代おける作品と呼ばれる人工物の中心にあるべきものは何か、置くべきものは何か」という自身の問いへの答えを得た。

2 学位論文審査の要旨

【論文】

「齣と間、その機能と意義 一様々な刺激を配置した表現に向けて」と題した本研究は、博士号申請者である韓子霏が、長期的な研究として掲げる「様々な刺激を配置した表現」の始まりと位置づけるものである。論文は、序論、本論（三章）、結論によって構成されている。

序論では、この研究の背景、自身の研究における位置づけ、主旨、課題、目的を整理し、それを受けて本論では、第1章「ON/OFF のデジタル的な表現の可能性」、第2章「人間を媒体として齣と間の表現はどのようになるか」、第3章「環境をモチーフとした表現の試み」という章ごとの研究課題に対する解として、制作作品がもつ意味を考察している。結論として、申請者が本研究において導き出した自身の問いへの解答を、デジタル社会の表現の本質に通じるものに普遍化して論じている。

序論において、申請者は「様々な刺激を配置した表現」の実現を目指す理由について、①「観賞者の豊富な情報/刺激の体験をより多く含む」②「情報/刺激の豊富さが必ずしも豊かな表現の実現を約束しないものであるとしても、その接触により、更に様々な思考が生み出される可能性が高まる」③「誕生した思考の重なり、輻輳により、更に深い思考の生成が促される」との仮説を述べている。

また、この研究は、申請者が中華人民共和国の大学において担当した授業中によく見かけた、「無限にイメージが生成され続けるデジタルデータならではの」と思われる現象への注目に端を発しており、博士後期課程に入学前に制作した映像作品《見る、見られる》において、目の映像を街に投影し、街と目の映像を重ね合わせることによる、ON/OFF のデジタル的表現を既に試みていることを記し、自身の研究課題が長期に継続してきたことを示している。

申請者は、現代を様々な意味が結びつくことで新しい意味、価値、イメージが次々と生み出されては消えていく時代、或いは生み出される意味や価値が定着することなく消費される時代として捉えている。その結果、本研究は、デジタルとアナログの技術や概念、生み出されるリアリティとの深い繋がりを持って、現代社会に充満する情報/刺激を感受しながら、表現に関する極めて基本的、根本的な課題に、論述と制作によって向き合っている。

本論においては、上記を前提として、申請者は、表現を構成する要素を情報/刺激と捉え、その集積、一纏まりを演劇や映画等の印象に残る一場面＝scene を現わす「齣」という語で表し、その「齣」とその周辺、或いは「齣」と「齣」の物理的な距離、或いは関係を「間」という語で統一して表記する。そのうえで、「齣」と「齣」、「齣」と「間」の間に

生成される、関係、構造の中に、デジタル技術の進歩とともに展開する現代の高度情報化社会における藝術の成立、表現の成立に関わる、「このような時代における作品と呼ばれる人工物の中心にあるべきものは何か、置くべきものは何か」という大きな問いへの論述と制作によるアプローチを三つの章で展開している。

第1章「ON/OFFのデジタル的な表現の可能性」では、デジタルの本質を論述している。

申請者は、ON/OFFという「デジタルの構造」を主題として創作した作品である《ビット絵本》《開き、閉じる》《時空標本》について、次に「ON/OFF」によって説明されるビットの仕組み、構造から「齟」と「間」へ展開した自身の考察について論じ、続いて作品表現の要素としての「齟」と「間」の概念を明確にしたうえで、「デジタル」と「アナログ」の紛れやすい概念の差異と、デジタル化とアナログ化について考察している。3つの作品の制作を通して、「動く」「移動する」ものが対象に何らかの働きかけをすることが、作品の成立についての最も重要な部分、要素であり、これによるアナログの連続性とデジタルの不連続的な「間」の垣根や差異の連結が、アナログとデジタルの紛れやすさを生み出していることを確認している。

第2章は、「人間を媒体として齟と間の表現はどのようになるか」という問いについて考察しながら、「人の顔」というモチーフを要素として、「齟」と「間」という概念を表現した作品について述べている。

ここで申請者は先ず作品《顔》と《目を閉じて見た顔》について論じ、続いて、デジタルとアナログの技術と形式の確認と、情報/刺激、伝達、認知の仕組みについて論じ、次に作品《時刻顔-間伸び》《無名の影-間伸び》《自己適応-間伸び》について考察している。後者の3点では特に「間」の問題を追求し「間伸び」というサブタイトルが付された。本章の最後に、「齟と齟の間」＝「藝術作品」の在処について、点描、モザイクまたは映像という三つの表現手法で、「齟」と「間」が藝術作品の中で具体的にはどのような役割を果たしているのかを考察している。5作品の制作を通して、申請者は「間」という言葉によって表される「もの」や「こと」に対して、表現に関わる実験と、それにより得られた効果を取り入れた創作を試み、「間の変化」や「間の調整」によって生み出される表現の可能性を追求している。「間」とは「間合い」であり、個々の「齟」の関係に現れる、「隙間」「隔たり」「落差」であることを、作品ごとに顔の形態を担う要素を変化させながら確認した。第1章では、「構造」「概念」に考察の主眼が置かれていたのに対し、第2章では、情報/刺激、伝達、認知の仕組みの観点から、「現象」に対する観察と感受へと考察の主眼が移されている。

第3章「環境をモチーフとした表現の試み」では、デジタルな情報と人間の行為が融合するような表現はどのようにして可能かを論述している。

ここでは、未完成作品《団栗》と《光音電車-20220909 飯田線》について考察することで、「環境」という概念を巡る制作を問い直している。申請者は、作品を、精神を入れる器と考え、生命のミニマムな器として《団栗》を制作した。考察は、生命が消えた後も、その存在を環境として維持しようとした祭祀に展開する。逆に《光音電車》では、無機的な環境である電車が、心臓の鼓動のように生命を感じさせる体験を実現している。これらの作品は、「環境」を文字通りに、部屋や場所として提示しようとする通常の表現とは異なる、極めてユニークなものとなっている。

結論では、「齟」と「間」この二つの要素を問題とした作品制作と本論文の考察の成果として、「情報爆発の時代と言われる現代社会において、作品と呼ばれる人工物の成立に何が必要であるのか」、「高度情報化社会と言われる現代における作品の中心にあるべきもの

は何か」、「デジタルな情報と人間の行為が融合するような表現はどのようにして可能か」という問いについて、「人間」「身体」「身体性」「想像力」を解として、本研究のまとめとしている。

申請者のような、「齟」と「間」を芸術表現の問題とした研究は管見にして見当たらず、また、デジタルという原理や構造を問う作品も同様である。申請者の研究は、先ずその意味で独創的な研究と判断できる。また、博士課程在学中の作品制作はその観点で貫かれており、一貫性を持ちながら進展を見せている。また申請者の研究は、表現者の視点のみにおいて得られたものではなく、申請者が母国において携わる教育職、いわゆる“教育の現場”における取組に端を発するものであり、その成果が中華人民共和国における教育に還元されることで、次世代の育成に寄与する可能性を大いに含んでいる。申請者の研究が長期的な取り組みとして位置付けられていることから、認知に関わる知覚情報も含めた新たな視座の獲得の可能性も期待される。

表現の成立、構成に関する極めて基本的、基礎的な構造への着目から始まった申請者の研究・考察は、基礎的、論理的な取り組みを重ねながら、創作的、独創的なものとして急速に姿を現し始め、自身の問いについての解を導き出すことに成功している。この解である「人間」「身体」「身体性」と「想像力」は、極めて常識的なものに見えるが、現代の情報社会の抱える一つの課題に対して、「齟」と「間」という二つの語を巡る論考と制作により得られたユニークなスタンスによって、「藝術」の有意性を示すものであると考えられる。

【作品】

申請者によって、審査の対象として申請された作品についての評価は以下のとおりである。

《ビット絵本》

本作品は、「デジタルの構造」を主題において創作した作品で、「ON/OFF」によって説明されるビットの仕組み、構造から「齟」と「間」へ展開した筆者の考察を示す作品である。作品表現の要素としての「齟」と「間」の概念、「デジタル」と「アナログ」の紛れやすい概念の差異と、デジタル化とアナログ化の構造を用いて造形化に成功しており、その意味では、本研究の出発点でありながら再帰着点となりうる普遍性が評価される。

《時刻顔-間伸び》《無名の影-間伸び》

同一の素材をもとに映像化と彫刻化という二つの方法で示したもので、彫刻は四次元的存在であり、2点の作品の間に出現するという感覚を抱かせ、《光音電車-20220909 飯田線》の前段階として捉えることができる展開を示す作品である。

《自己適応-間伸び》

「環境に適応しなければならない人間」をコンセプトとして制作された作品で、社会環境という枠に対して適応しながら様々に変容する人間を、申請者自身の証明書写真の映像を極端に細長く変形させることで表した。人間の枠の形態を対象とした前2作に対して、自己を内容物とした《光音電車-20220909 飯田線》の前段階として展開した作品である。

《光音電車-20220909 飯田線》

極度に抽象的でありながら、観者に様々な感情を引き起こす優れた作品である。申請者の思想である、「齟」と「間」が変換可能であるという仮説を具体的に感じさせるという意味においても優れていると評価できる作品である。

《ビット絵本》から《光音電車-20220909 飯田線》至る作品の流れを追うと、ゲルハルト・リヒターが示した、写真的表現—鏡—アブストラクトペインティング、そしてカラーチャートに至る問題提起とほぼ重なると言ってよい。これは21世紀の課題であるポストモダン思想を超える表現と言っても過言ではなく、その意味において高度な研究内容を示していると評価できる。

【口頭発表】

申請者は、論文、作品の主旨、内容等についての発表を、与えられた時間内において準備した資料を用いて過不足なく行った。発表に用いられた資料は、申請者の研究内容について十分に整理された上で作成されたものであり、研究内容との整合性、分かり易さによって、研究内容についての申請者自身の理解を審査員が確認、担保するに十分なものであった。また申請者は、審査員からの質問に対して、論文の章ごとの論述と対応した作品の制作意図、構造などを示しながら端的に回答するとともに、不明点を含む今後の研究課題、具体的な計画及び長期的な展望等も含めて回答を行った。それらは研究者としての考え方、姿勢を備えるに至ったことを示す真摯なものであった。

申請者の論文、作品、口頭発表に関して、これまでの研究の推移を確認しながら、研究の合理性、充実度、独創性・新規性、国際性等に対する有意性について検討した結果、申請者による本研究は、この要件を十分に満たしていることを確認した。これは博士の学位を与えるに十分なものであった。以上のように、韓子霏はこの論文及び作品において、博士の基準を満たすことを示した。

3 最終試験結果の要旨

2023年1月20日、愛知県立芸術大学附属芸術資料館において、予め提出された論文、展示された作品、及び13時から行われた30分間の口頭発表等に基づき、本報告書審査員氏名欄に記した4名の審査員により、学位申請者である韓子霏に対して20分間の口頭試問による最終試験を実施した。最終試験結果の要旨は以下のとおりである。

申請者は、論文、作品の主旨、内容等についての発表を、準備した資料（パワーポイント）を用いて、与えられた時間内において過不足なく行った。発表のために準備された資料は、申請者の研究内容について十分に整理された上で作成されたものであり、申請者自身の研究内容についての理解度の確認と担保に十分なものであった。また質疑応答においては、申請者は、審査員からの質疑に対して、論文の章ごとの論述と対応した作品の制作意図、構造などを示しながら回答した。申請者は、本研究の成果にもとづきながら、現時点における不明点、今後の研究課題、及び長期的な展望等も含めて回答した。それらは、研究者としての考え方、姿勢を備えるに至ったことを示す真摯なものであった。

審査員は申請者のこれまでの研究の推移を確認しながら、現時点での課題も含めた研究の合理性、充実度、独創性・新規性、国際性等に対する有意性について検討し、韓子霏による博士後期課程における研究「齟と間、その機能と意義—様々な刺激を配置した表現に向けて—は、これらの要件を十分に満たしていることを確認した。これは、博士の学位を与えるに十分なものであった。但し、審査員全員の総意として、論文中に散見される誤字等の表記上の誤り等についての修正を、期日までに実施・完了することを博士論文の最終的な受理の条件とすることとし、全ての審査を終了した。